

日仏会館討論会

「宗教・ライシテ・道徳」

2014年3月20日、日仏会館フランス事務所の主催で日仏会館（東京都渋谷区恵比寿）での公開討論会が開催された。テーマは「宗教・ライシテ・道徳 日仏の道徳・宗教教育と新たな政策」(Religion, laïcité, morale Morale laïque, culture religieuse et nouvelles politiques en France et au Japon)であった。

講師はパリ国立高等研究実習院のジャン・ボベロ (Jean BAUBÉROT) 教授と私で、上智大学の伊達聖伸准教授が司会をした。

私は戦前戦後の日本の宗教教育を戦前三期と戦後の合わせて四つの時期に分けた上で宗教教育の課題に触れた。

戦前の第一期：明治前期、すなわち1870年前後から1890年前後あたりの時期である。

戦前の第二期：1890年前後から1920年前後の時期である。

戦前の第三期：1920年代後半から1945年までである。

戦後：1945年以降現在まで

戦前については国家の宗教教育とくに宗教情操教育と道徳教育に関する関与の変遷を概略述べたのちに、現代における宗教教育の問題点について私見を述べた。

戦後の宗教教育についての議論では、宗教教育を①宗教知識教育、②宗教情操教育、③宗派教育の三つのタイプに分けて考えるのが一般的である。このうちもっとも議論になったのが、公立学校において宗教情操教育が可能であるかどうかであるが、宗教情操教育をめぐる議論は複雑であるうえにイデオロギー論争の性格が保たれているので、合意に至る可能性は乏しいことを指摘した。

そして最近ではカルト問題が浮上し、またグローバル化・情報化に対応するような新しい宗教教育のあり方が論じられるようになった。それを受けて提唱されたのが宗教文化教育であることを述べた。

ボベロ教授は「宗教文化とライシテな道徳フランスにおける新たな教育政策か」という題で発表し、フランスにおけるライシテの原則が、現在どのような局面を迎えているかについて説明した。

私の発表に対してはボベロ教授から、三つの質問があった。①日本における道徳教育と倫理の連続、とくに初等教育から中等教育にわたる教育の関係について、②宗教文化教育と宗教知識教育との違い、③「寛容」と「リスク・センシティブ」という概念に関連して、宗教文化教育と道徳・倫理教育はどう関係するか。

私もボベロ教授に対し三つの質問をした。①宗教教育とライシテをめぐる問題に関して、政府の政策とは別に、教員による問題解決のための自主的なネットワーク形成の試みはあるのか、②インターネット時代の宗教教育の難しさについてどう考えるか、③ムスリムの団体は、公立学校での宗教文化教育のようなものに、どのような態度をとっているか。

それぞれの質問に対して回答がなされたのち、出席者からも質問がいくつかなされた。両国にとって非常に大きな課題となっているテーマであったので、突っ込んだ意見交換の場になった。

(井上順孝)